

巻頭言 進化する教育、ティーチングおよび学習

経営学部長 山中 馨

先日、国際産学ワークショップという大学教育と産学連携を考えるワークショップへ出席してきた。掲げられた副題は「進化する教育、ティーチングおよび学習」と言うものであった。米国、カナダ、イギリス、ドイツ、ブラジル、韓国等などの大学学長を始めとする各国の出席者から提示された問題は、それぞれのお国柄を反映して様々ではあったが、その中で驚くほど共通の話題があるものだと痛感した。読者の方々の参考になるかも知れないと思い、ここに少々紹介してみたい。

教育界におけるFDに関しては、アメリカのポートランド・コミュニティカレッジ学長のキヤレロン氏から話題の提供があった。彼は21世紀の近未来においてアメリカの労働力を変革させ、地域における生活の質の改善のために、米国におけるコミュニティカレッジが果たす役割の重要性を強調していた。この場合、継続的な教育と訓練が必要であるとして、大学でのFDに言及して、次のように言っている。大学の教

員はただ単に教授することのみを考えるのではなく、学生が何を学び、どのように大学が学生・教員とともに学ぶことを支援できるかに注意を払わなくてはならない。この場合、教育・学習支援の環境作りが肝要であり、教授法の常の改善と、学生がどのようにして学んでいるかを教員が理解をすることが重要である。そして、ケンブリッジ大学のFDの先進事例の紹介があった。

ドイツのパデルボーン大学の学長であるウェーバー氏はknowledge-driven society（知識・学習指導社会）の概念から、これからは無形資産である知識が社会をリードするとして、この社会でもスピードが大切な要素であるとしている。一番始めに新しい知識にアクセスできる人間は誰か。それはその知識を創造した人間、その人であるとして、大学での価値創造の重要性と、大学間のネットワーク作りの大切さ、若い研究者を積極的に養成して、瑞々しい頭脳で新しい分野に挑戦させることの重要性を指摘していた。

前駐米大使の柳井俊二氏は最近中央大学で教鞭をとるようになった経験から、日本の大学教育に関して国際人の目から見た幾つかの重要なポイントを指摘している。日本の大学は今まで似たような知識をもった人間を作ってきたが、これからは多様な能力の人材を育てるよう方向転換しなければならない。その対策として、

知識の詰め込み教育でなく、幼稚園の時から個性を生かした教育をすること。ディベートの訓練を重視すること。学生の成績評価を多様化すること。ディベート能力を評価に入れること。産・公間との人事交流を活発にすること、などを挙げている。

アメリカFD事情 Vol.3

ゲートウェイとしてのFDセンター

教育学部 坂本 長朗

アメリカ合衆国でのFD事情についての現地レポートもはや最終回となりました。そこで今回は、ボストンの近郊にあるT大学のFDセンターのある“事件”について考えてみたいと思います。

T大学は、19世紀半ばに設立されたときは典型的な宗派大学であったのですが、現在はリベラル・アーツの学士課程を中心しつつも、その上に様々な専門大学院を擁する都市型の小規模総合大学へと発展するに至っています。この大学のFDの状況を詳しく知るために訪れたいと考えるようになったのは、5月も初めの頃でした。

その理由は、大学の規模や構成からいっても、わが創価大学とそれほど大きく異なるわけではない上に、ホームページを見ているうちに、FDセンターの一つのモデルとして考えができるのではないかと思ったからです。

英語に、ワンストップ・ショッピングということばがあります。「一か所で買い物は何でも間に合う」という意味です。このコンセプトがアメリカ合衆国大学界に導入されてからすでに30年近くが経ちます。最初は、いわゆる社会人学生をどのように大学に引き寄せるのか——週末に一か所に出かけて行って短時間ですべて買い

物が済ませられるショッピング・モールをつくれば集客力が大幅に向かうように、忙しい社会人学生にとって、大学のカリキュラムや施設もそのような形態をとれないか——ということ



ハーバード大学ケネディ政治学院

で始まったわけです。私自身、以前、アメリカ合衆国のある女性大学のことを調べていた際に、傾きかかったこの女性大学が見事に復興した理由の一つが、このコンセプトの導入であったことを確認したことがあります。

さて、社会人学生と同様に忙しいのが大学教員でもあるわけで、みずからの教育・研究能力の向上を願いつつも、日常の多忙さのために、「FDについては、いずれ時間がとれたときにまとめて」となってしまう教員も多数いるはずです。この人たちにとって、ワンストップ・ショッピングができるFDセンターをつくれば、毎週とまではゆかなくとも、日常的に教育・研究能力の向上に刺激的な機会となるはずです。T大学のFDセンターもまさにそれを狙ってつく

られたものでした。

しかし、上にも述べましたようにT大学は小規模総合大学ですから、FDセンターそのもので教員の多様な教育・研究上の職能開発を一手に引き受けことには無理があります。そこで、センター自体がFDのためのプログラムをもつ以上にむしろ、センターが学内外の様々なFDにかんする情報のゲートウェイとして——ゲートウェイとはもともと、異なるデータ通信ネットワークなどを相互に接続するための装置を意味します——機能することを目指しています。

前述のように、私が最初にT大学のFDセンターのホームページを閲覧したとき強い印象を受けたのは、「よくこれだけ膨大な情報を、手際よく提示できるものだ」ということでした。また別の言い方をすれば、「奥が深い」ということでしょうか。

「手際よい提示」について一例を挙げます。センターが主催するFDワークショップなどは当然、しかるべき広報がなされるわけですが、FDの難しさとは、「××を使用した○○教授法の技法」などという、そのものズバリというような講演でないとしても、ある教員にとってはFDの得難いチャンスとなる催しが学内には結構あるわけです。しかし、これはどこをみればその予定がわかるのでしょうか。ゲートウェイとしてのセンターのホームページは、これをとてもうまく提示しています。

「奥が深い」とは、たとえばこのようなこと

です。そもそも、FDとは当該の大学ではどのようなコンセプトで、どのような基本的なプログラムがあるのか、ということは、全教員に配布されるFaculty Handbookの中に書かれていますが、よそではどのようにになっているのかを知りたい場合は、基本的にはその大学に照会するしかないので、T大学のセンターホームページではこれを実に丹念に収集（電子版にはリンクを、冊子版については、センターのライブラリーが所蔵）しています。

さて、センター長のB教授と連絡を取り、さらに外部からの調査を重ねて、そろそろ現地に出かけるかという6月末ごろになると、妙なことに気づくようになりました。センターのホームページの更新が停止しただけでなく、上述のセンター・ライブラリー所蔵資料の検索エンジンが動かなくなり、さらにリンクがうまく張られていないケースにしばしば出くわします。さて、どうしたものかと思っていると、ある日、センター長の名前が消えて、別の教授が臨時のセンター長になったことが知らされます。あわててB教授にメールで照会したところ、このたび、ウィスコンシン大学に移籍したとの事実を知らされました。

これもあとで知られたことですが、実はT大学のFDセンターのホームページは、情報の収集からウェブ・デザインまで、B教授がほぼ一人で完成させていたのです。さらに、B教授の本来の専門である国際関係論について、同

教授は別にForeign Affairs Onlineというウェブ・サイトを立ち上げており、こちらの方は、ユネスコやアメリカ議会図書館の公式ホームページの中でもポータルサイトとして登録されているだけでなく、検索エンジンGoogleの国際関係論トップ20の中に入っているとのことでした。なるほど、よくできていたはずです。

ここからえることができる教訓は月並みですが、やはり肝に銘じるべきことでしょう。ウェブベースの学習=教授がすでに、アメリカ合衆国の学士課程・大学院課程のほとんどすべてで導入され、ついには大学における教授=学習概念そのものを変容させつつあるように、ウェブベースのFDとでも言うべきものが構想可能であり、それは従来のFDを変える可能性をもつこと、しかしそれは未だに発展途上であり、その構築には高度な知見と技術が必要であるということです。さらに最後に、このような知見と技術をもった人物一人だけに依存していると、ある日突然、システムそのものの停止に追い込まれる恐れがあるということでしょうか。

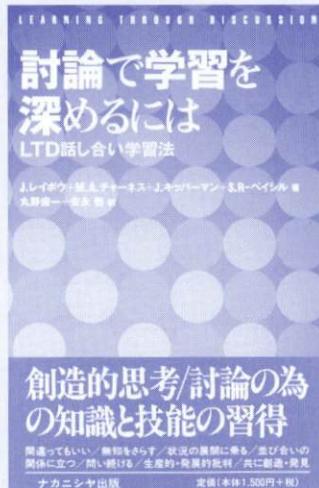


第二回教授法ワークショップを開催

10月30日（水）安永悟教授（久留米大学文学部）を講師にお迎えし、今年2度目の教授法ワークショップが開かれた。「大学の授業におけるグループ学習の活用」のテーマで紹介されたLTD（Learning Through Discussion）学習法は大学の講義形態に新しい選択肢を加え、学生の学習の深まりを援助する有力な方途の一つである。（研修内容の詳細はFDシリーズとして後日冊子化される）。安永先生はLTD学習法を様々なクラスで試みられ、その成果をいくつもの論

文にまとめている。

単なる実践紹介ではなく、緻密な研究に基づいた内容は、傾聴に値する有意義なものであった。



教授技法研修会に参加して

通信教育部 開沼 正

「授業中に寝ている学生がいる」ということで、お悩みの方はいらっしゃるでしょうか？私は私もその一人です。授業アンケートでも、「話し方が単調」、「眠くなる」という意見が毎回いくつか寄せられます。そこで話し方に関する本を読んだり、授業では学生に興味ありそうな視点を提供したり、問い合わせかけたり、教室内を巡回しながら話したりと工夫をしてみましたが、それでも寝る学生がでてしまいます。

「つまらない講義でご免なさい」などと照れ

半分に言いながら寝ている学生を起こしているときに、自分の無力を強く感じingおりました。大人数の授業で寝る学生が何人かでるのは仕方がない、と割り切ろうとしたこともあります。そんな折、創立者から一冊の本をいただきました。その本には『礼記』の一節が揮毫されていました。「いい教員になれ」という激励だ、と私は受けとめました。学生が寝ないだけでなく、充実感・満足感をもてるような授業方法はなんだろうかと考えるようになりました。

そこで出会ったのが安永先生の実践されているグループ学習法でした。これは学生一人一人が、ある課題について予習してきたことを持ち寄り、授業では5、6人のグループで話し合うことによって、課題をより正確に理解させようとする方法です。私も以前から授業の終わりに課題を出し、その日の授業の要点をまとめさせるという方法をとり、学生に「人の言うことを理解する力」と「自分の理解したことを文章で表現する力」をつけさせようとしておりました。しかし安永先生の方法ならば、「話し合う力」もつきますし、他の学生の視点を知ることもできます。また各学生がどれだけグループに貢献したかということも客観的に評価されますから、

安永先生の感想

多くの先生方にお集まりいただき、LTDの話を聞いていただき、深く感謝しています。先生方の今後の教育実践に何らかのお役に立てれば、これ以上の喜びはありません。加えて、講演会後には素晴らしい先生方と親しくお話しさせていただき、とても楽しい時間を過ごすことができました。改めてお礼申し上げます。

創価大学の教育・学習活動支援センターは、きっとさらに内容が充実し、大学にとってなくてはならない貴重な存在になると思います。久留米大学のセンターは創価大学のセンターを強く意識して誕生しました。創価大学のセンター

一人だけ楽をするというわけにもいきません。まさに私がイメージしていたのにぴったりの授業形態です。

グループ学習で時間をとられる分、講義に使える時間が減り、講義の内容を絞り込まなければならぬという面もありますが、一方的でつめ込むだけの講義に対して、アンチテーゼになると思います。このグループ学習法の詳しいステップをここで述べることはできませんが、学生が将来必要になるさまざまな能力を伸ばしていくける方法なのではないかと感じました。この方法を何らかの形で授業に活かしていこうと考えております。

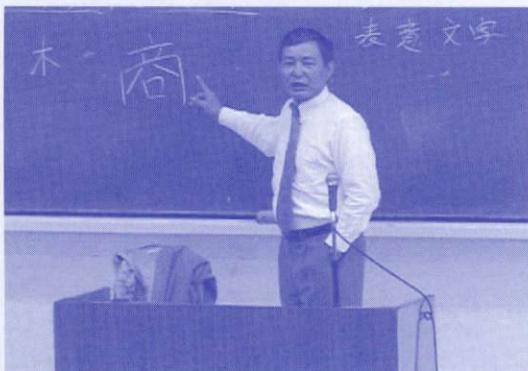
をひとつのモデルとしながら、理想に向かって努力したいと思います。今後も情報交換をさせていただければと思います。よろしくお願ひします。



今回の講演会で頂いた先生方のコメントを参考に、今後とも、LTDの理念を生かしつつ、大学の授業改善をさらに進めていきたいと思っています。

本年度第2・3回の授業見学会を開催

「流通論」渡辺隆之教授



経営学部渡辺教授のご協力で10月16日（水）2限目に授業見学会に行われた。S201教室が適度なサイズに感じる程、多くの学生が受講していた。渡辺教授の授業には定評がある。1年次生向けの『流通論』という科目の性格もあってか、実践的な話題が多い。この日は「なぜ、ヤマサ醤油はキッコーマンに勝てないのか？」という問い合わせから授業が始まった。事前に課題として出されていたのであろう、複数の学生がその理由を述べていく。それを上手に引き受けながら、渡辺教授は流通における地理的要因をクラス全体に気づかせていく。問合の取り方がとても旨い。口角泡を飛ばす熱弁ではないが、そ

の語りは学生を惹きつけていく。遅刻者の入室や私語で授業が乱れることもない。かつてNHKラジオ番組で「ビジネス講座」を担当されたこともあるとか。今でも寄席に出かけて落語家の話術を楽しんでいるという。この辺りに、お客様を聴かせる技の秘訣があるようだ。

この授業を見学した岡田先生（経営学部）から感想が寄せられたので、ここでその一部を紹介しておく。

「私は一学生となって先生の講義に引き込まれたが、あとから振り返ると次の二点が特徴的であったと思う。すなわち、まず「謎（雑学）をうまく使う」ということである。例えば、今回の講義範囲は「流通業における川の存在」ということがポイントになっていたが、そこで「川」に関するちょっとした謎を問い合わせるのである。次に、最小限の内容を板書することで、必要以上を教えないという工夫がされているということである」。

渡辺隆之先生の感想

1年生の授業では、特に、どれだけ興味を引き出せるかに重点をおいて講義しているつもりです。理論を教えれば誰でも眠くなってしま

いますから（私でも）、身の回りの誰もが経験する事柄を題材にして、その“裏”を説明してあげるのです。例えば、『下らない』という表現は

本来どういう意味か皆さん知っていますか？ほ
ら、興味をそそったでしょう！この言葉は江戸

時代の流通に関係があるのですよ。

「情報教育論」関田一彦助教授

11月13日（水）教育学部関田助教授のご協力で、児童教育学科1年次対象の『情報教育論』が授業公開された。授業はビデオ教材とその内容に関する学生同士の話し合いを中心に展開していく。この授業を見学した先生方の感想をいくつか紹介しておこう。

「学生たちは総じて熱心に授業に取り組んでいて、学生同士の話し合いも豊かに展開されていた。授業の構成、教材（ビデオ）の的確な活用、先生の発問が刺激的であることなど、よく検討されている授業だと感じた」（園田教授—教

育学部）。「学生への発問のタイミングと助言、語りかける態度が非常に印象的で勉強になりました。考えることを教える教育として、答えを教える前の問題提起が生きています。学生の側に立った問い合わせがビデオ教材を生かすことにつながっていて、ビデオを見ながらメモをしつかり取る学生を見て驚きました。」（清水助教授—教育学部）。「非常に親しみやすい話し方・語りかけ方で好感を持ちました。また授業の内容をうけて私の専門の国語教育の重要性について再認識しました」（井上教授—教育学部）。

Information

L T D 教授法のワークショップ第二弾が、経営・経済両学部との共催で企画されています。前回と同様、安永悟先生（久留米大学文学部教授）を講師としてお迎えして、簡単な実体験も含め、L T D 教授法の基礎が学べるように配慮されています。関心のある方は、教務課松岡正治まで至急ご連絡を（内線 2145、メール matsuoka@j.soka.ac.jp）。

日時：3月7日（金）10時から17時

場所：A棟会議室を予定

編集後記

安永先生の研修会を聞いてとても印象的だったのは、グループ学習では学生をとことんまで信頼することだそうです。とても考えさせられる一言でした。（U）

C. E. T. L. Quarterly No. 9

編集・発行
創価大学 教育・学習活動支援センター
〒192-8577 八王子市丹木町1-236
Tel: 0426 (91) 9782 内線 2148
E-mail: cetl@s.soka.ac.jp